第三回分裂　岸沢派

135 ◉常磐津太夫　文中（岸沢文中一世）（天保七―大正
分離前　和歌佐太夫、後、長門太夫

本名石井彦造　天保七年八月八日青山大番町の侍家人の長男に生れ
幼名を源太郎と云う、始め蒔絵師となる、初代和佐太夫の門に入り
常磐津を学んでいるうち音曲の方へ身が入り遂に三十才の頃太夫となり
和歌佐太夫と名乗る　和佐太夫と共に、寄席や小芝居に出ていたが、その中
和佐太夫が常磐津に後歸するに従って彼も共に入り若佐太夫と云って
小文字太夫の三枚目に出勤、明治三十五年十一月から口上格となり三十一年
一月新橋芸妓長門太夫と改む

136 ◉常磐津兼太夫（岸沢兼太夫二世）（弘化四―大正十二）
分離前、島太夫、後、男女太夫

弘化四年三月三日浅草橋場町に生る　米穀商直七の子にて本名を石渡
新吉と称す、十五才の頃蒔絵師になんとせしも眼を病みて断念し
十七、八の頃より清元延寿太夫の弟子となりいたるより、太夫とならんと
志し、蒔絵師を断念して六代目式佐の弟子となり修行（自語）
大正十二年の震災で死す

137 ◉常磐津千歳太夫

138 ◉常磐津佐喜太夫　初め綾瀬太夫

139 ◉三代目常磐津松尾太夫　初め三代目三登勢太夫

140

第三回分裂　常磐津派

◎二代目常磐津志妻太夫　初め　岸沢式蔵、次、三代目和佐太夫
次、佐喜太夫

弘化四年九月三日本所松倉町に生る。先代小国次の子役に出たりあり
十三の太左衛門の門人となり見習いにあり。十三の時四代目古式部の弟子となり
西本式蔵となり、市川市蔵の「奴凧」が初舞台、後上州へ行き
明治十七年東京へ帰り、鍛冶町の文字兵衛との約会いから太夫となり
五代目若太夫の弟子となり明治二十年十月二十三日三代目和佐太夫と
なり、〇〇〇と打ち、式佐の尽力で、林中が離縁になる間もなく
明治三十年一月十三日佐喜太夫となり林中に従い居たり。明治三十九年
八月九日二代目志妻太夫となる。本名を山本彦太郎と云う

141

◎常磐津瀧生太夫（唐応元―大正）　初め、國尾太夫
本名瀧尾四郎吉と云い、唐応元年十月三十五日生れなり、明治三十七年
三月六日常磐津林中の方にて國尾太夫と云う名を取りしも近親の
反対に遇い、同年五月廃業し素人となりしも、明治三十九年新旧合習
の会の稽物所より召喚をうけ名を國尾太夫にて出ているが四十年に
弥生太夫と改名せり

142

◎六代目常磐津和歌太夫（明治五―大正九）初め、三代目小和佐太夫、次、若喜太夫
初代和佐太夫の孫にあたる。即ち三代和佐太夫の長女和佐子の子なり
明治五年八月十三日生。初めは商人たらんと志せしも一門の関係により
此の道に入り明治三十二年夏三代目小和佐太夫となり、後少しの間小和歌
太夫と云いしも次に若喜太夫と改め明治四十四年十二月十六日六世
和歌太夫をつぐ

143 □四代目常磐津和佐太夫（安政―大正）　初め男佐太夫
本名河原兼吉と云い、五代目和歌太夫の弟子なりしが同人没後二代目
都太夫の弟子となり、明治末年四代和佐太夫をつぐ（ら安和歌太夫弟）

144 □三代目常磐三國太夫　初め、兼寿太夫
八丁堀の國弘と云うセンナ鍛冶の伜なり、もと兼菊の弟子にて兼寿
太夫となる。美男なりき、せき肩へけ出す、仇名をコノシロと云う
脳病で死す

145 □常磐津小常太夫
初代都太夫の長男なり　捨にて終る

146 □常磐津緑太夫　初め常磐太夫
指物師なり、三枚目語り、大正四年六月没す、享年七十四才